

Bulletin 271

2017 秋号



COLONNADE

アーキテクト・ガーデン2017 建築祭 報告
第26回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール

FORUM

海外レポート／覗いてみました他人の流儀／日本版CABEを考える／温故知新
バックヤードツアー／委員会活動報告／地域会だより／部会活動報告

1部 委員会サミット

会場：建築家会館本館1階大ホール

この委員会サミットは、委員会再編を「広く意見を聞き深掘りする」きっかけの場として開催されました。

はじめに藤沼傑支部長より委員会再編主旨として赤字体質改善、人材不足対策、事務局負担軽減、活動状況理解の容易化のためと説明がありました。次に、日々多彩な活動を行っている19委員会のうち、13委員会の活動報告が行われました。

その後意見交換では「委員会再編の前に、大変だが事業活動の整理が先決」「経費はそんなに使わず費用対効果が高い活動を皆行っている」等々…また「若手会員の興味対象外からの脱却」「次世代の興味を引くことが必要で恐れず変化が必要」「県域と支部との活動を整理する」という再編へ向けての具体的な意見がありました。

一方、会場からは「地域会一支部の委員会に翻弄されている」という意見があり、委員会再編は県域地域会に位置付け



説明される藤沼支部長

を踏まえて考える必要があることも明示されました。幹事からは「職能団体として活動しやすい環境を整えられる魅力ある団体を幹事会では目指したい」と再編

へのひとつの主旨が明示されました。最後に「県域地域会との連携も視野に

入れ少人数・少予算・事務局負担軽減・活動を効率よく活発化していきたい」と藤沼支部長より総括があり、委員会サミットは閉会いたしました。

今回、課題と目標は見えてきましたが、強い思いで共有できる再編主旨が見出されなかった気がします。そんな中、法人協力会員からの「発足時にあった強い協会が取り戻せれば会員が増える。私はそこを一番期待したい」の一言が心に残りました。



3部 AGパーティー

会場：JIA館1階建築家クラブ

メイン・シンポジウムの余韻をそのままに「7.7 AGメインイベント」最後を締めくくるのはAGパーティー。スペインvs日本と銘打ち、スペインサイドとしてワイン、JIAのパーティーではお馴染みとなっている生ハムの原木をカットしてのサービス、他にも肉料理やパエリアなどを準備、片や日本サイドはご当地自慢として、支部全域の各県地域会推薦の酒の肴に、東京都内の酒蔵の日本酒数種類を取り揃えました。

シンポジウム登壇者にも参加いただき、前半はシンポジウムの熱気そのままに熱い議論が各所で交わされていました。



シンポジウムの余韻そのままにパーティーがスタート

そして今年度のパーティーいちばんの盛り上がりは、なんといっても建築家バンド(URBAND)による生ライブ。想い出の渚に始まり、襟裳岬のAGバージョン、キャロル・キング、ビートルズまで皆が自然と体を動かし、一緒に歌を口ずさむような素晴らしいライブでした。

楽しいひと時はあっという間に過ぎ、最後は皆さんの温かい拍手により、歴史あるAGメインイベントの幕を下ろしました。



URBANDによる生ライブ

講演会・シンポジウム・セミナー

●杉並地域会

2017年度JIA杉並土曜学校 第1回

「建築家の本棚」+トークイベント「私の一冊」

5月20日(土) 会場：杉並区立角川庭園・幻戯山房～すぎなみ詩歌館～ 参加者：14名

爽やかな五月晴れの中、2017年度JIA杉並土曜学校 第1回を開催することができました。当日は5人のJIA杉並メンバーにより「私の一冊」と題してトークイベントを行いました。角川書店の創立者である角川源義邸の数寄屋住宅を見学しながら、貴重な本との出会いや自身の設計経験談を和やかな中、気軽な質問も交えて、楽しみました。

JIA杉並の若手会員候補が手伝ってくれたのは、今後の活動に大きく前進できる機会になりました。より一層、活躍できる場としてともに作っていただければと思います。(中村雅子)



旧角川源義邸
(登録有形文化財)



南方熊楠顕彰館設計コンペの話。その人物像にまつわる書物などを曾根幸一氏と堀正人氏の対談形式で。

●住宅部会

JIA建築家と考える暮らしと住まい「人と環境に優しい住宅とは？」

—少ないエネルギーでも気持ちよく暮らせる住まい—

5月20日(土)

会場：リビングデザインセンター OZONE 7F 住まうとサロン

講師：大川直治(大川建築都市設計研究所)、落合雄二(U設計室)

コーディネーター：湯浅 剛(アトリエ六曜舎)

参加者：8名(一般参加)

「自然エネルギーを最大限活用し、枯渇エネルギーに頼らず、効率よく省エネが実現できる住まい」「再生可能で環境負荷の少ない自然素材を活用した、肌触りが良く、経年変化を楽しめる住まい」「適正な温熱環境により、住まい手が気持ちよく健康的に、そして自分たちらしい暮らしを実現できる住まい」「自然と共存し、愛着を持って住み継いでゆける豊かな住まい」について紹介しました。

高い耐震性能、耐火性能、優れた意匠、スムーズな動線計画や十分な収納。これらも家づくりには大事な要素ですが、快適な温度や湿度を維持できる建物性能、安全な自然素材で構成された温かみのある室内、明るく風通しの良い、自然を感じさせる空間など、やや見えにくい「心地よさ」への配慮が、「人に優しい住まい」を実現します。

また再生可能な自然素材の採用や、施工・運搬方法への配慮、住み始めてからの高い省エネルギー性能、再生可能(自然)エネルギーの活用、メンテナンス性への配慮などが、サステナブル(持続可能)な「環境に優しい住まい」には必要です。

建物の数値だけで、その住まいの「心地よさ」は判断できません。逆に性能を疎かにしても、気持ちのよい暮らしは実現できません。住む人によってバランスの取り方は異なりますが、まずは敷地のポテンシャルを最大限引き出し、自然エネルギーを上手に活用し、一定の建物性能を確保した上で、



実例1 蔵前の家
(設計：大川建築都市設計研究所)



実例2 目白の家
(設計：U設計室)

住まい手の暮らしに寄り添うデザイン、素材の選定を行うこと、これによりはじめて「人と環境に優しい住まい」が実現できます。

このようなお話をいたしました。

(湯浅 剛)

実例1 都市部の住まい

都市部の住宅は、敷地が狭く、周囲に建物が建て込んでいて、プライバシーの確保さえままならない。そのような場合でも、まずは敷地条件を正確に読み込み、どこから光や風を取り込めるか、どこに開いてどこを閉じるべきか判断することが大切。また近隣建物のサイクルを時間軸として捉え、シミュレーションしておくことも必要である。

実例2 自然素材を活用した住まい

自然素材は、肌触りが良く、経年変化で古びる良さを楽しむことができ、調湿作用もある。また、再生可能なものが多く、製造時のエネルギーや、廃棄時に環境負荷が小さいことから、環境にも優しい。傷につきやすく、屋外に使うと朽ちていくという問題もあるため、長所・短所を理解して活用することが望ましい。